

南ウェールズの世界遺産ビッグ・ピット Big Pit — 炭坑の歴史と国立石炭博物館のマネジメント

Big Pit (National Coal Museum in south Wales; The World Heritage) : The history of the colliery and the management of the Museum

藤田 憲一

文化政策学部文化政策学科

Kenichi FUJITA

Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

南ウェールズのブレナヴォン Blaenavon 産業遺産群が、2000 年にユネスコから世界遺産の指定を受けた。この中で、主要なものは、炭坑遺産としてのビッグ・ピット Big Pit とブレナヴォン製鉄所である。私は共同研究者とともに、2011 年に大学院研究科長の特別研究費の助成を受けて、この世界遺産を訪れ、視察・調査を行った。この論文では、特にビッグ・ピットに焦点を当てて、炭坑の立地・歴史、炭坑で働いた人々の姿、国立石炭博物館の遺跡建物とマネジメント、などを概観し、分析する。

Blaenavon Industrial Landscape in South Wales was designated as a World Heritage Site by UNESCO in 2000. The most important industrial heritages of this site are Blaenavon Ironworks and Big Pit. In 2012 I visited this site with my colleagues and surveyed the industrial heritage of colliery and ironworks. This paper, focusing on Big Pit, describes the history of the colliery and the life of the people who worked there, and discusses the buildings and management of Big Pit as National Coal Museum.

はじめに

19 世紀末、ウェールズは世界で最も主要な石炭産出国のひとつであった。1913 年、これは 600 以上の炭坑から、6 億トン以上が生産されていた時期であるが、ウェールズの人口の 10 分の 1 以上が石炭産業に雇用されており、それより多くの人々が石炭業に生存を依拠していた。

しかし、石炭産業は衰退し、20 世紀末にはウェールズにはたったひとつしか炭坑が残っていないという状態になってしまった。ここ 2 世紀以上にわたって、ウェールズの何百もの炭坑が閉鎖され、その痕跡も消えてしまった。ただし、ブレナヴォンのビッグ・ピットは例外である。ここはかつては 1300 人を雇用し、1 年に 25 万トン以上の石炭を生産した炭坑であるが、今では世界的な博物館として子孫のために保存されている。すなわち、ビッグ・ピットは、1980 年に閉山となったが、1983 年に国立石炭博物館として再出発したのである。

現在も炭坑の機能を部分的に残している。巻上機関は今でも稼働している。ただし、現在は縦坑に入っていくのは炭坑労働者ではなくツーリストである。ビジターはもと炭坑労働者のガイドに伴われ、ツアーに加わり、炭坑労働の追体験をすることができる。

2000 年には、ブレナヴォン製鉄所跡とともにビッグ・ピットはユネスコから世界遺産に指定され、産業革命を支えた産業遺産としての重要性はいつそう広く知られるようになり、内外から多くのビジターを集めている。

本稿では、まずビッグ・ピットの立地と炭坑産業の歴史を辿る。次に、炭坑で働く人々の姿を概観する。最後に、産業遺産としてのビッグ・ピット石炭博物館の建物とそのマネジメントを分析していくことにする。

メインの参考文献として、National Coal Museum (2005), Big Pit: A Guide, National Museum of Wales を利用した。また、その他利用した文献は本稿の末尾に挙げてある。

I ビッグ・ピットの炭坑産業

1. 石炭の生成

「悪魔が石炭を作った。自分と同じく真っ黒な色にして地中に隠した。人間に必死で探させるためだ。」——これは、19 世紀のウェールズの炭坑労働者の言葉として、よく引用される表現である。それは楽しい空想であるが、実際は、石炭のほとんどは植物である。

石炭は、3 億年ほど前にこの地に生えていた植物の圧縮された遺物にはかならない。その頃ウェールズは、赤道に近く暑く湿っていた。森が沼地や川の土手に育った。枯れて腐った植物が、泥炭の厚い層を形成した。植物の成長、洪水、埋没そして再生のサイクルが何万年にもわたって繰り返され、泥、砂、そして泥炭の層を形成した。上の層の重みで圧縮され、泥炭の層は石炭となったのである。

2. ウェールズの炭田

ウェールズには南北に 2 つの重要な炭田がある。北ウェールズの炭田は、長さ 45 マイル、一番広いところで幅 9 マイル、そして Bala 断層によって分断されている。

北ウェールズの炭田は、この地域の鉄工業の隆盛に依拠している。1870 年～1913 年の間、年間採炭量は 200～300 万トンだった。しかし、産業は次第に衰退し、1974 年には 2 つの深い炭坑のみが残って採掘をしていた。Point of Ayr が北ウェールズ最後の炭坑で、1996 年に閉山した。

南ウェールズの炭坑は、東はポンティプール Pontypool から、西は St. Bridges Bay の東まで広がっている。それは、長さおよそ 90 マイル、幅が一番広いところで 16 マイルである。地域全体で、およそ 1,000 平方マイルとなる。

炭田は周辺から中心に向かって沈み込む窪地を形成している。周辺部は、石炭層が比較的容易に得られ、それゆえ採炭活動が始まった場所である。炭田の中心部の石炭層は最後に採掘されることとなった。そこは比較的深くて、採

炭が難しいからである。

3. ウェールズの炭坑

19世紀の後半は、南ウェールズにとって、好景気の時代だった。1913年には、炭坑は5700トンという最高値に至り、23万2800人の労働者が、620の炭坑で働いていた。しかし、1920年代の初めから、長い不況に苦しむことになる。1936年までに241の炭坑が閉山し、炭鉱労働者は、半減して13万人となった。

石炭産業は南ウェールズにとって重要な産業であり続け、1947年の国有化の時までに、135の大きな炭坑があった。しかし、緩慢な衰退は続き、2004年までに、現役炭坑はたった一つになってしまった。

北ウェールズの石炭は、ほとんどが高揮発性で、鉱物製造に使われるコークスの材料となり、また家庭の暖房に使われる。

南ウェールズはもっと多様なタイプの石炭を有している。この地の石炭は、家庭用、ボイラー用、コークス用（金属精錬のため）、ガスの製造用、などを含む広い範囲の利用方法がある。

ウェールズでは、30億トンの石炭を掘ったが、しかし、80億トンがまだ地中に残っていると推計されている。（1957年、イギリス石炭庁推計による）

11の異なった石炭層が、ビッグ・ピットで採掘されてきた。その石炭は、コークス用に適していた。しかしボイラー用石炭としても適していた。

ブレナヴォンの石炭は、低灰で硫黄分も少なく、それと相まって、高度のスチーム発生能力を持っていた。スパークリングがまったくなく、鉄道にはもっとも重要であった。また、かなりの石炭が、蒸気船に使われた。当時のウェールズの2つの鉄道は、どちらもお得意様だった。最初のフランスの鉄道会社も同様だった。ブレナヴォンの石炭は、南アメリカとインドにも定期船で輸出された。採炭地から積み出し港までの交通手段は、最初は馬の背で、後には、運河、トラム、鉄道が使われた。

4. ビッグピットの経営

1787年に英国中部からやってきた3人のビジネスマンが現在ブレナヴォンとなっている土地を、地主であるアベルガヴニー卿 Lord Abergavenny からリースした。そこに3基の溶鉱炉が造られ、1789年には鉄の初生産が行われた。1796年にはウェールズで2番目に大きな溶鉱炉となった。これらの製鉄所が、この地域で最初の大量の石炭需要を生み出した。そして、多くの炭坑がこの需要を満たすべく開設され、162の横坑、34の縦坑を記録した。

ビッグ・ピット（当時はKarsleyピットと呼ばれた）は、1860年に開設され、それは、いくつかの別個の炭坑が融合したものであり、とても複雑な歴史を持っている。1880年にKarsleyピットは、直径と深さを増して、ビッグ・ピットと名前を変えた。

ビッグ・ピットの名称は、縦坑の幅から取られている。それは長円形で、最長径は5.5メートルあり、ブレナヴォン地域で最大だった。ほとんどのケージは一度にトロッコ dram 1台を巻き上げるように設計されていたが、ビッグ・

ピットの形状とサイズにより、2つのトロッコを隣合わせに積むことができた。

1896年に528人がガス用、家庭用、ボイラー用の石炭を生産するために雇われていた。1908年には、労働者の数は1145人まで増えた。この同じ年の12月11日には、ビッグ・ピットの部分的な爆発で3人が亡くなった。

1947年に、ビッグ・ピットは国有化され、イギリス石炭庁の一部分となった。1967年、ビッグ・ピットは、完全に機械化された方法で、ある石炭層を採掘し始めた。同炭坑は、1973年にブレナヴォン新炭坑と名称を再度変更された。この石炭層は、最大30インチの厚さしかなく、1980年には採炭を停止した。

II ビッグ・ピットで働いた人々

ビッグ・ピットで働き、生活をしていた人々の様子をここで描写しておきたい。炭鉱労働者、女性・子ども、労働組合の順に見ておく。

1. 炭坑労働者

① ビッグ・ピットの炭坑労働者の気質

Aubrey Flynn というビッグ・ピットの鉱山次長 under-manager が、1970年代に概略次のように書いている。

＜ビッグ・ピットで働くということには、何か特別なものがあつた。それはひとつには炭田の端っこという位置取りの故である。離れたピットなので、他のどこよりも家族的だった。労働者は皆交流し合い助け合った。そして、職人魂は最高レベルだった。仲間意識はレジャー面にもあふれていた。ラグビーの試合やコンサートにも一緒に出かけたものだ。

ビッグ・ピットの労働者はみなニックネームをつけるのが大好きだった。たとえば、いつも走り回っているのは Hot Feet、また別の人は仕事に行くのに深い雪をかき分けて歩くので Snow Shoes だ。採炭は大変な仕事だ、肉体的につらいばかりでなく、心理的にもつらい。身の回りには危険が一杯だから。ユーモアのセンスは、大きな財産だ。

社員と炭坑労働者の関係はとてもよかった。炭坑労働者の1970年代初期のストライキの間も厳しさはまったくなかった。ピケ衆と一緒にお茶を飲んだものだ。私は病気でここを辞めなくてはならなかった。ピットが閉められる3年前だった。多くの幸せな思い出と共に去った。＞

② 炭坑災害とレスキュー

南ウェールズの炭田の南の端に位置するというブレナヴォンの地域特性のゆえに、縦坑は浅く、危険なガスが比較的少なかった。しかし、災害がなかったわけではない。ブレナヴォンで最悪の災害が、1838年に起こった。すなわち、Cinder 縦坑が出水し、15人の炭坑労働者が溺死したのである。1908年に、火山性ガスの爆発で3人の男の人が亡くなった。1913年には、3人の炭坑職員が窒息死した。

その他の災害や傷病もあった。爆発よりも、落盤や輸送

事故での死者の方が多い。炭坑労働者は、灯りが乏しいので眼病に、重い者を持ち上げるのでヘルニアに、やかましい道具を使うので聴覚障害に、苦しむことになる。すべてのうちで最悪なのは、炭坑の粉塵の吸引による数千人の死亡、そして後々まで続く緩慢な死である。

19世紀における炭坑災害の増加にもかかわらず、炭坑のレスキューは、常設ではなく、ボランティアベースのものであった。1911年になってやっと、炭坑法が炭坑オーナーに、レスキュー・ステーションを開設することを義務付けた。そして1911年と1918年の間に、南ウェールズで5つ、北ウェールズで2つのステーションが開設された。第一次世界大戦までに、通常の炭坑災害のひどい時代は終わりを迎えた。もっとも、20世紀になっても大きな災害はやはり無くなったわけではない。

1947年の石炭産業の国有化の後、炭坑レスキューは発展させられた。レスキュー・ステーションは、よく訓練された隊員と十分な設備を整えた専門的なものになった。ウェールズの最後に残ったレスキュー・ステーションは、ロンザ Rhondda の Dinas に置かれている。

③ 労働着

白いヘルメットとオレンジ色の衣服が今日の炭鉱労働者の特徴であるが、しかしこの姿は、比較的最近のものである。昔から1970年代半ばに至るまで、炭坑労働者は自前の労働着を整えなければならなかった。それは普通、その時々ファッションに従ったものだった。

衣類は丈夫でなければならず、しかもあまりタイトなものではいけなかった。汚くても差し支えなかった。1970年代には、炭坑労働者はラップズボンのジーンズ、絞り染めのTシャツを着ていた。帽子は1930年代末には安全ヘルメットに取って代わられた。最初圧縮カーボンでできていたが、1960年代にはプラスチックヘルメットに替わった。今ビッグ・ピットの地下ツアーで使われているのもこれである。

オレンジ色の労働着と無料の洗濯サービスの導入とともに、家で汚れた衣類を洗濯するということは終止符を打った。3組の衣類が与えられた。一組は着るため。もうひとつは洗濯するため。もうひとつは、非常用である。

④ 労働時間

1842年には、炭坑労働者は、1日あたり12時間働いていた。1890年にはおよそ10時間に減った。1908年の8時間労働時間法が通った後は、炭坑では月曜日から金曜日まで8時間労働のシフトを5つ、土曜日には4時間のシフトを1つ、となった。1947年に週5日労働制が導入され、1960年には炭坑労働者は週あたり37時間働いていた。祖父世代のほぼ半分ほどの労働時間ということになる。

⑤ 経営者

炭鉱労働者に関連して、経営者についても触れておこう。製鉄業者は例外なくイギリス人であったが、初期の炭坑オーナーの方は、ふつうウェール人であった。彼らは、地域に住み、ウェールズ語を話し、そして宗教的には非国教会派で、政治的にはリベラルであった。多くは、学校・

図書館・病院・チャペルなどを開設し、自社の労働者たちのために福利厚生につとめた。しかし、20世紀までには、ほとんどの炭坑保有者は、コミュニティを離れてしまい、労働者から距離を取り始めた。1947年に石炭産業は国有化されて、オーナーは歴史上の存在となった。

2. 女性・児童

19世紀半ばまで、女性と子どもが英国の炭坑で働くのは普通のことであった。

5歳から11歳の間のほとんどの子どもは、「ドアボーイまたはドアガール（つまり、通風口開閉係 trappers）」になった。彼らは、炭坑労働者や石炭が通過するのを通すため、換気ドアを開け閉めするのである。暗闇の中で長時間の労働をした。もっと年長の子どもたち（普通14歳から17歳）は、よくトロッコ曳き trammers として働いた。石炭の入ったトロッコや轎を、坑外に通じる幹線道まで運んだ。

児童労働の問題に対処するため、児童雇用委員会が1840年に設置された。委員たちは、児童労働のみならず、女性労働者たちの仕事の実態にもショックを受けた。その結果、女性や子どもの保護のため、1842年に坑内労働を禁止する法律が制定された。しかし、違反行為は跡を絶たなかった。児童は1860年代----議会が学校への出席を義務的なものにした年代----まで、違法に地下で働き続けた。20世紀の初頭においても、子どもたちは11歳という早い年齢で労働を開始した。その後、卒業の年齢は1944年になって15歳に引き上げられた。

女性の状態はどうであったか。ロンザにおいては、10歳以上の女性のわずか14%しか、賃労働者として記録されていない。しかし、炭坑コミュニティにおける女性は重要な労働の一翼を担っていた。

家事は風呂沸かし、掃除、子育て、家計保持など、重労働であった。1940年代の後、炭坑に軽工業が導入されるにつれて、女性の雇用はより普通のこととなった。このことは、炭坑労働者の妻が工場やオフィスで自分のシフトをこなし、さらに帰宅後に掃除や料理や育児をこなすということを意味した。負担はいわば二重となるわけである。

3. 労働組合

個人ではないが、炭坑で働く人々にとって重要な役割を果たした、人の集団としての労組について、概観しておく。

1898年に、南ウェールズ炭坑労働組合が設立され、1914年には、組合員およそ20万人を抱える、英国で最も大きな単一労組となった。1944年に、それは炭坑労働者全国ユニオンの南ウェールズ支部となった。それは常に最も戦闘的な労働組合のひとつで、全英国規模の争議において、指導的な役割を果たした。

南ウェールズ炭坑労働組合は、炭坑における生活の中で、より広い役割を果たした。第二次世界大戦の後まで、炭坑住宅は、事実上単一の産業のコミュニティであった。石炭産業の中で、この炭労はコミュニティを統括し、コミュニティの守護者としての役割を果たした。したがって、炭労は通常の労働組合としての活動を行いながら、人々の家庭生活や社会生活の中に組み込まれてもいた。

第二次世界大戦後の組合の機能のふたつは、炭坑労働者

のガラ Gala (お祭り、運動競技会) と炭坑労働者のアイステッズヴォッド Eisteddfod (文化大祭) である。後者は、1948 年に始められたもので、この種の労働組合主催の唯一のものである。ガラは 1953 年の本質的には政治的な集会だったのが、ブラスバンドやジャズバンドつき、スポーツコンテスト、アートやクラフトの展示会などのついた、家族ぐるみの遠足行事へと変化していった。

Ⅲ ビッグ・ピット石炭博物館の建物とマネジメント

1. 世界遺産の指定

ビッグ・ピットやブレナヴォン製鉄所を含むブレナヴォン産業ランドスケープが、2000 年にユネスコから世界遺産に指定された。このエリアの産業遺産は、石炭と鉄の生産を通して産業革命がはかられるプロセスを、社会的、経済的および技術的な面から総体的に学び・理解することができる、世界的に重要な価値を持ったものである。

ブレナヴォンの町とランドスケープは、産業革命の多くの記念碑的なものを含んでおり、そのうち、多くのものがすでに公衆に開放されている。また、将来追加的に開放される見込みのものも存在している。



ブレナヴォン製鉄所跡
(著者撮影 2011.8.17)

2. ビッグ・ピットの建物

ビッグ・ピットを訪れると、有料ながら 64 頁の詳細なガイドブック (National Coal Museum (2005), Big Pit : A Guide, National Museum of Wales) が入手できる。

その末尾に施設内ツアーの地図が載っており、①から⑳までの番号がふられている。順に見ていくと次のとおりである。①受付・ショップ、②待合室、④地下ツアー／ピットヘッド、⑤トラムサーキット／ランブルーム、⑥のこぎり工場、モルタル工場、⑦巻上機関建屋、⑧炭坑ギャラリー、⑨ファン・ハウス、⑩炭坑風呂と展示、⑪食堂、⑬観望室、⑭爆薬庫、⑯鍛冶屋、⑰教育室、⑱カフェ、⑲操作および資材室、⑳保存工場およびストア。(③⑫⑮はトイレ)

これらのうち、この炭坑遺跡として特に重要な意味を持つのは、④、⑤、⑦、⑨、⑩であろうと思われる。これらについて、以下に少し詳しく記述しておく。



ビッグ・ピットとブレナヴォンの市街
(著者撮影 2011.8.17)

1) 地下ツアー

このツアーには、退職した炭鉱労働者がガイドとして同行してくれる。ビジターはメインの縦坑 shaft を 90 メートル (300 フィート) 下降した後、本物の地下採掘の一部を 50 分ぐらいかけて歩いて回る。そこには馬屋、エンジンハウス、切り羽などが含まれており、ガイドたちはそれぞれの体験などを交えながら、説明をしてくれる。ツアーの間、ガイドもビジターも、かつて炭坑労働者が使ったのと同じ機器を使う。すなわち、ヘルメット、キャップランプ、ベルト、バッテリー、などである。バッテリーはかなりの重量があり、子どものビジターには少し辛いかもしれない。トンネル内は、かなり湿気が多く、天井からの浸み出しや、地面のぬかるみに遭遇することもある。



地下ツアーへの入り口
(著者撮影 2011.8.17)

2) ピットバンク、トラムサーキット、ランブルーム

縦坑の上のあたりは、「ピットバンク」と呼ばれており、地下ツアーに出かけるあるいは戻るビジターでごったがえしている。もともとピットバンクは、炭坑労働者と資材が下ろされ、石炭がトロッコに乗せられて上がってくる、うるさい場所であった。

トラムサーキットは石炭が詰め込まれたトロッコがたど

るルートである。トロッコは、ケージで地上まで持ち上げられて、回転箱 tippler の所まで自重でレールに沿って走る。回転箱は、トロッコを上下に揺さぶり、石炭をぶちまけて選鉱ベルトの上にのせる。ここで石炭はマーケットの需要に合わせて様々なサイズに選り分けられる。空になったトロッコは、もっと高い場所に運ばれる。そして、ピットの支柱材を載せられ、重力でピットヘッドに戻ってくる。これで、サーキットが完了する。

ランブルームは、最近の建造物である。1960 年代に消失した元の建物の基礎の上に建てられた。現在の建物は、現在ビジターとスタッフの両方によって使われている電気キャップランプの維持と充電を行っている。炭坑では、炭坑労働者はシフトの最初にランブルームに入り、自分のランプ預かり札を提出する。そして自分の電気キャップランプを受け取る。シフトの終わりに、彼はランプを充電ラックに返却し再度充電をしてもらう。そうするとランプマンが、ランプ預かり札を返してくれる。預かり札はランブルームに保管され、ある時点で誰が地下にいるかを判断することができる。これは事故の際には、決定的に重要な情報である。ビッグ・ピットのランプマンは、安全ランプのメンテナンスもしている。今日では炭坑の職員によってガス発見機として持ち運びされるだけだが、かつてはこのランプが炭坑労働者の唯一の光源であった。

3) 巻上機関ハウス

巻上機関 winding engine は、炭坑の心臓部といえる施設である。石炭、人、資材を載せたケージを、縦坑に上げ下げするものである。ビッグ・ピットの巻上機関は 50 年以上経っているが、現代的な部品で十分にアップグレード化され、多くの安全システムと、作動を調整・監視するいくつかのコンピューターが組み込まれている。巻上機関を扱う者の仕事はとても責任が重く、したがって集中力を必要とするものなので、施設見学ツアーの際、ビジターが写真撮影のためフラッシュをたかようなことをしないようにと要請されている。

現在の巻上機関は、1952 年に建造された。1947 年の石炭鉱業の国有化に続くビッグ・ピットの改善の一部として行われたものである。以前の蒸気機関の巻上機関は、現在の電動式のものに取って代わられた。巻上機関の作動で、人・物が移動する。ビッグ・ピットの最盛期には、午前・午後のシフトの労働者がそれぞれ 400 人、そして夜のシフトがおおよそ 200 人に上った。また、すべてのシフトを合計して、おおよそトロッコ 500 台分の石炭が運び出された。

なお、火薬庫の近くに再建された水衡機 water balance は、Brynpwlllog 炭坑(または Roger ピット)で、19 世紀半ばから使われてきた巻上機関であった。この水衡機は、カーディフの国立博物館&ギャラリーで、長年屋外で展示されていたのを、ビッグ・ピットに移転したのである。この方式の巻上機関は、ウェールズでは 19 世紀の前半にきわめて一般的なもので、ビッグ・ピットを含むブレナヴォンのいくつかの炭坑で用いられたタイプのものである。

4) ファン・ハウス fanhouse (送風室)

これは、どの炭坑でも最も重要な建物のひとつである。換気システムは、酸素を炭坑の中に送り、有害なガスやちり、煙などを取り去るか、あるいは希釈する。そして炭坑で働く労働者のためにより涼しく乾燥した環境を提供するのである。

ビッグ・ピットの元々の換気システムは、Koity の縦坑の底辺近くの暖房炉に依存していた。暖房炉で温められた汚れた空気はこれらの縦坑を登っていき、他方でビジターが現在降りていく縦坑を新鮮な空気が入って行って入れ替わるのである。

元々のファン・ハウスは、1896 年暖房炉に替わる蒸気エンジンのファンを収容するために建設された。そのファン・ハウスは現在の建物に取って代わられた。これは、1910 年に今日見られる電気エンジンのファンを収容するために建てられたものである。

ファンの操作者は、2 時間ごとにファンのチェックをするだけだが、ファン・ハウスは 24 時間人がついていなければならない。ほとんどの炭坑で、ファンの操作者は他の仕事も併せて与えられる。ビッグ・ピットのファン・ハウスでは、電話交換の作業や空気圧縮機の操作を兼任した。

5) 炭坑風呂 pithead bath

今では、炭坑風呂が炭坑労働者とその家族に与えた大きなインパクトを想像することは難しい。この風呂ができる前は、炭坑労働者は汚れたまま家に歩いて帰って、暖炉の前あるいは裏庭においたブリキの風呂に入って体を洗うしか他にやり方はなかった。その準備と後始末をしなくてはならない女性の労働は、たいへんだった。ビッグ・ピットの炭坑風呂は、1939 年に開設された。この炭坑風呂の導入の背後には、もっと公正な社会を創り出そうとするより広い社会改革運動が存在していた。この社会改革運動には、高齢年金の導入、女性の選挙権、国営の健康サービス、および戦略産業の国有化などが含まれていた。

炭坑風呂は、大陸のモダニズムのスタイルで建てられた。モダニズム建築は、炭坑労働者福祉委員会 Miners' Welfare Committee (こうした建物の建築に責任を負っていた団体) の建築家たちに好まれたのである。

風呂はどのように使われていたのかを述べておこう。炭坑労働者は、それぞれ、建物の中の違った場所に設けられたふたつのロッカーを与えられていた。炭坑労働者は普段着を自分の「クリーンな」ロッカーの中に置いておく。それから弁当箱やタオル、石けん箱を持って、「汚い」dirty ロッカーに歩いて行く。そこで彼は労働着を着て、シフトのため縦坑の上に歩いていく。シフトの終わった後には、炭坑労働者は「汚い」ロッカーで労働服を脱ぐ。そこで衣服はロッカーを常時吹き抜ける暖かい風によって、次のシフトに間に合うように乾かされることになる。風呂が終わると、彼は服を着て家路をたどった。

現在、炭坑風呂の遺跡の中には 4 か所、展示スペースが設けられている。物や画像を使ってウェールズの採炭の物語を説明するためである。

3. ビッグ・ピット石炭博物館のマネジメント

既に述べたように、ビッグ・ピットの炭坑保存の特長は、歴史遺産を、できるだけ当時の姿のままに、しかも関連施設を含めて包括的に保存しようと努めているところにある。ばらばらに保存・展示するのでは、産業化の実現に炭坑が果たした役割を総体的に捉えることは難しいであろう。世界遺産指定を受けた後も、以前に埋めてしまった施設を再び元に戻そうという試みがなされていることは、高く評価できる。

また、ビジターが訪問しやすいように様々な工夫がなされていることも注目される。そのひとつの例が、身体の特性上、各サイトへのアクセスが難しい人たちに対する施設構造の工夫や対応である。たとえば、車いす利用者が地下ツアーに参加を希望する場合には、そのようなツアーに適したタイプの車いすを貸し出すサービスを行っている。

さらに、誘導ループシステム（客のヘッドセットにループアンテナで音声を送信）が、ビッグ・ピットのさまざまなポイントに設置されていて、ビジターの理解を助けている。

情報発信も充実しており、ウェブサイトや受付で、あるいは郵便で、請求すればアクセスガイドブックを手に入れることができる。学校などのグループ訪問のために、「Planning your visit」という小冊子を発行し、これも無料で配布している。

2001年以降、ウェールズのすべての博物館は入場無料となった。ウェールズ国民議会 the Welsh Assembly

Governmentの援助によって無料化されたのである。このことによって、ビッグ・ピット、ブレナヴォン製鉄所を主要な構成要素とするこの地域を訪れるビジターの数も次第に増えていくのではないだろうか。無料化は、ひとつの文化政策の展開として、意義深いことと思われる。

このように、ビッグ・ピット石炭博物館には、日本の産業遺産の保存・展示、マネジメントに関して、参考になる点が多々あると思われる。

（この研究報告は、平成23年度文化政策研究科長特別研究「産業遺産の利活用による地域振興戦略について：イギリス・アイルランド・ベルギーの事例を題材に」の研究成果の一部をなすものである。）

注・参考文献

- Chris Barber (2002) , Exploring Blaenavon Industrial Landscape World Heritage Site, Blorenge Books
- David Owen (1999) , Images of Wales: Maerdy Rhonda Valley, Tempus Publishing Ltd.
- John Cornwell (1993) , Collieries of Blaenavon & the Eastern Valleys, Landmark Publishing
- John O' Sullivan (2011) (first published in 2001, and this new paperback edition first published in 2011) , A Photographic History of Mining in South Wales, The History Press
- National Coal Museum (2005) , Big Pit : A Guide, National Museum of Wales
- National Museum of Wales (2010) , The Pithead Baths Story, National Museum Wales Books
- Peter Wakelin (2006) , Blaenavon Ironworks and Heritage Landscape, Cadw Welsh Assembly Government